

コリマ・ユカギール語の長母音の 音韻論的解釈をめぐって

遠藤 史

1. はじめに

北東シベリアのコリマ川上流地域（行政的区分としては主にロシア連邦サハ共和国）に話される少数言語であるコリマ・ユカギール語（Kolyma Yukaghir）の母音を観察すると、短母音と長母音の両方が認められる。長母音の存在は音声学的な観察では明らかであるが、適切な音韻論的解釈をここに与えようとする、事態はそれほど簡明ではない。この論文では、コリマ・ユカギール語の長母音に関する様々な音的現象を検討することによって、これら長母音に対する最も適切な音韻論的解釈は何かを論じてみたい¹⁾。

この論文の構成は以下のとおりである。まず第2節では、コリマ・ユカギール語の短母音と長母音をめぐり基本的な観察結果を紹介したのち、本論文での問題意識を提示し、長母音について少なくとも3つの音韻論的解釈が考えられることを論じる。次いで第3節では、それら3つの音韻論的解釈を順番に検討する。ここでは、より詳細なデータに当たりながら、それらの解釈の利点と問題点をそれぞれ指摘する。最後の第4節は結びである。

この論文の主旨は、筆者がかつて提示したコリマ・ユカギール語の記述（遠藤 2005）の延長線上にある。その記述の中では、この言語の全体像を描くという目的のために、議論の細部は省かざるを得なかった。今回はその際に省略された部分を補い、新たなデータを加えることで、この現象をより深く掘り下げてみたい。

2. コリマ・ユカギール語の長母音

2.1 長母音の音声的観察

コリマ・ユカギール語には6つの短母音が観察され、それぞれを母音音素として解釈することができる。この解釈は Krejnovič (1979) 以来、研究者の間で概ね共有されてきた。筆者の現地での観察に基づけば、これら6つの母音音素の体系は表1のようになる：

1) 本研究は JSPS 科研費 16K02675 および 21K00526 の助成を受けたものです。過去の数回の現地調査の際、筆者を暖かく迎え入れてくださったネレムノエ村の皆様方に心からの感謝を申し上げます。

	前舌	後舌
狭	i	u
	e	ö o
広	a	

表1 コリマ・ユカギール語の短母音音素

この表では、上下の軸が口の開きの度合いを、また左右の軸が舌の前後の位置を示す。それぞれの母音音素の音価は、/i/ [i] mit [mit] 「私たち」、/e/ [e] met [met] 「私」、/ø/ [ø] örje [ørdʒə] 「中心」、/a/ [a] abut [abut] 「袋」、/o/ [o] foromo [foromo] 「人」、/u/ [u] emul [emul] 「鳥」である。なお/e/は、アクセントの置かれない位置で弱化して[ə]となる傾向が（話者によっては顕著に）見られる：n'a:če [n'átʃə] 「顔」など。

以上の短母音と並んで、この言語には長母音と二重母音も観察される。調音位置から見た長母音と二重母音の体系は表2に示すとおりである：

	前舌	後舌
狭	i:	u:
	ie	uö uo
	e:	(ö:) o:
広	a:	

表2 コリマ・ユカギール語の長母音と二重母音

この表の中で二重母音はie, uö, uoの3つであり、その他の母音は長母音である（以下では記号[:]によってその母音が長いことを示す）。長母音の調音は同一の短母音が2つ連続したものと捉えることができ、その長さは短母音のおおよそ2倍である。二重母音においては前の母音から後の母音への滑らかな移行が観察されるが、母音のウェイトは後ろの母音の方が若干大きい（上昇二重母音）。なお、長母音ö: [ø:]は音声学的観察では生じないため（Krejnovič 1982:10）、表中では括弧に入れてある（長母音ö:は実際には音韻論的解釈に際して要請されうる。次節で

の議論を参照されたい)。

長母音が単語中に現れた例を以下に示す：

- (1) 長母音 i: is'e [i:fə] 「てっぺん」, todi: [todi:] 「歯」
 長母音 e: me:me: [me:me:] 「熊」²⁾
 長母音 a: n'a:če [n'a:tʃə] 「顔」, ʃal [ʃa:t] 「木」, jola: [jola:] 「(～の) 後 (で)」
 長母音 o: o:ji: [o:dʒi:] 「水」, jo: [jo:] 「頭」

また、二重母音が単語中に現れた例を以下に示す：

- (2) 二重母音 ie kučie [kutʃie] 「蚊」, kiel'o:ʃ [kiel'o:ʃ] 「乾いている (3人称単数)」
 二重母音 uö uö [uø] 「子」, tuön [tuøn] 「これ」
 二重母音 uo jukuol [jukuol] 「若い (こと)」, juol'ot [juol'ot] 「病気で」

長母音の長さは、名詞や動詞などの屈折においても変わらない。たとえば、is'ege [i:fəgə] 「てっぺんで」(is'e 「てっぺん」、-ge 所格), o:ji:ge [o:dʒi:gə] 「水 (の中) で」(o:ji: 「水」、-ge 所格), jola:t 「(その) 後から」(jola: 「後」、-t 離格要素), kiel'o:je 「乾いた」(kiel'o: 「乾いている」、-je 形動詞) などの例を観察しよう。これらの例に見るように、何らかの屈折接尾辞がついた場合でも、長母音はそのままの長さで保たれている。この言語における長母音は、音声学的に見れば安定した存在と言えよう³⁾。

2.2 長母音の音韻論的解釈

それでは、これらの長母音（並びに二重母音）は音韻論的にどのように解釈すればよいのだろうか。解釈としては3つの可能性が考えられる。以下、(A) から (C) において、それらの解釈を提示する。

(A) 長母音を短母音音素に還元する

音韻論的に長母音の存在を認めず、音価が同じである短母音音素に還元する。つまり短母音

2) Krejnovič (1982:10) によれば、長母音 e: の出現頻度は高くなく、事実上この me:me: 「熊」一例だという。この単語自体も、音形から見る限り、擬音語あるいは忌み言葉の可能性はあるだろう。

3) ラテン語では状況が異なっている。ラテン語は短母音と長母音を持つが、屈折において両者は交替しうる。たとえば動詞 amāre 「愛する」の活用で、amās (2人称単数) や amāmus (1人称複数) では長母音 ā が現れる一方、amat (3人称単数) や amant (3人称複数) では短母音 a が現れる。さらに詩などでは、韻律を考慮した長母音から短母音への交替も一部に見られるという (cf. 中山 2007:24)。

音素の異音として長母音を解釈する可能性である。

この可能性を示唆するのは、同一の音的環境において、短母音と長母音が対立するような最小対が見出し難いという事実である。たとえば日本語の場合、オバサンとオーバーサンの対は、それぞれ違った意味に対応している。オジサンとオジーサンの対も同様である。音的環境を比べてみるならば、このような違いを生じさせているのは結局のところ、短母音と長母音の差異である。つまり日本語では、同一の音的環境において短母音と長母音が対立するような最小対を見出すことができ、しかもそのような例は多い。これに対してコリマ・ユカギールの場合、このような最小対を見出すことは難しい。

具体的な例を検討してみよう。たとえば長母音 a: を含む単語として、sal「木」と tat「そして」を取り上げる。この場合、相当する短母音を含み、かつ異なった意味を持つような *sal や *tat を見出すことができれば好都合であるが、残念ながらそのような形式は見出せない。このことはもっと簡単な例でも同様であり、たとえば a-「する、作る」(動詞語幹)、o:「ズボン」、uj-「働く」(動詞語幹)などは存在するが、*a, *o, *uj というような形式は見出せない。このように、コリマ・ユカギール語では、同一の音的環境において、短母音と長母音が対立するような最小対は存在しないように思われる⁴⁾。

このような状況の下では、両者が実際には同一音素の異音にすぎないと解釈できる可能性が出てくる。その場合、何らかの適切な音的環境を見出すことによって、基底形(短母音)から長母音を導き出す規則が作れるかどうかが問題となる。

(B) 独立した長母音音素を認める

音韻論的に長母音音素の存在を認める。つまり、短母音音素と長母音音素を別々に立て、両者をそれぞれ別々の音素として解釈する可能性である。

この解釈の可能性は、上述の二重母音の性質の検討から示唆される。既に述べたように、この言語に3種類の二重母音が生じることは音声学的に確かめられる。しかし、より詳しく二重母音を観察すると、以下の例に見るように、二重母音がそれぞれ、終わりの部分の母音を延長した長母音と交替しうるケースが認められる：

(3) 二重母音 ie kiel'o:je [kiel'oidzə] ~ [ke:l'oidzə]「乾いた(形動詞)」

ierej [ierej] ~ [erej]「流れている(3人称単数)」

二重母音 uo jukuol [jukuot] ~ [juko:t]「若い(こと)」

noŋuon [noŋuon] ~ [noŋon]「なぜ」

4) 慎重を期するならば、すべての単語を収集したと言い切れない以上、最小対立例が「存在しない」と断言することはできない。以下の議論では、たとえ少数でも最小対立例が見出された可能性を考慮に入れ、それに対処できる方法を考えている。特に3.3節の議論を参照されたい。

ここでは二重母音 ie が長母音 e: と、また二重母音 uo が長母音 o: と交替している。このような交替は意味の違いをもたらさない。したがって自由変異的と見なすことができよう。この事実注目して二重母音と長母音を互いに異音と解釈すると、音韻論的には二重母音を長母音音素に還元することが可能になる。さらにここで、音声的には観察されない長母音音素 /ö:/ を仮定し、二重母音 uö (uö「子」, juö-「見る」などに現れる) がここから生じると考える。この仮定を置くことによって、この言語の3種類の二重母音 ie, uo, uö はそれぞれ、長母音音素 /e:/, /o:/, /ö:/ に還元できるだろう。

この解釈の下では、コリマ・ユカギール語の長母音の体系は表3のようになる：

	前舌	後舌
狭	i:	u:
	e: ö:	o:
広	a:	

表3 コリマ・ユカギール語の長母音の音韻論的解釈（試案）

表1（短母音音素の体系）とこの表3を比べると、両者が体系的には全く同じ姿をしていることが分かる。つまり、この音韻論的解釈を採用すれば、短母音音素と長母音音素の体系が同じ姿であるような、非常に均衡の取れた母音音素体系をコリマ・ユカギール語は有することになる。このような体系の「美しさ」はこの解釈の魅力であろう。

(C) 長母音を短母音の連続として解釈する

音韻論的に長母音音素の存在を認めず、同一の短母音音素2つが連続したものと長母音を解釈する可能性である。二重母音は異なった短母音音素2つが連続したものと解釈できる。

この解釈では上記(A)や(B)と異なり、音素の解釈にあたって多くの仮定を持ち込む必要がない。その意味で技術的にはシンプルな解釈である。この解釈の下では、たとえば長母音 i: は /ii/ (短母音音素 /i/ が2つ連続したもの) と考えることになる。したがって todii: 「歯」は /todii/ のように、また o:ji: 「水」は /oojii/ のように解釈される。

議論の余地があるとすれば、長母音をこのように解釈した場合、2番目の短母音音素に対して、日本語音韻論でしばしば論じられるような長音素 /R/ (先行する母音を伸ばす特殊な音素) を仮定する必要があるか否か、という点である。ただし、このような音素を導入すれば、結果

的に音素の数が1つ増える。これはデータを慎重に検討しつつ考えるべき問題であろう。

3. 長母音の音韻論的解釈の検討

以上の提示を受けて、本節では3つの音韻論的解釈の可能性を順番に検討していく。具体的には、より詳細なデータを検討しつつ、それぞれの解釈の利点と問題点を論じていく。

3.1 解釈 (A) の検討

解釈 (A) は、音韻論的に長母音の存在を認めず、音価が同じである短母音音素に還元する、というものであった。議論をわかりやすくするために、短母音音素の異音として長母音を解釈する方向性に絞って論じることしよう。この場合、何らかの適切な音的環境を見出すことによって、基底形 (短母音) から長母音を導き出す操作を行うことになる。

既に指摘したように、コリマ・ユカギール語では、同一の音的環境に短母音も長母音も現れることができるにもかかわらず、両者が音韻論的に対立するような最小対を見出すことはほぼ不可能である。したがってこの「音的環境」を探するには、前後に現れる音素のような狭い範囲を超える、より広い視野に立つ必要がある。

この方向性の追求において一歩を進めたのは、コリマ・ユカギール語のテキスト集 Nikolaeva (1997) である。このテキスト集には多くの語り手による、現代のコリマ・ユカギール語の民話・民謡が多数収録されているが、ここではそのテキスト本文の表記に注目する。同書でニコラエヴァは、ユカギール語研究でそれまで採用されてきたものとは若干異なる表記を採用した。具体的には母音 ə の導入と、長母音 (の一部) を短母音で表記するという手法の採用である。この両者は互いに関連している点があるので、以下の議論で共に取り上げる。

母音 ə はもともと、このテキスト集と同時期に出版された短い文法概説 Nikolaeva and Xelimskij (1997) で導入された。この文法概説の中での表記は e であり、他の短母音や長母音とともに母音の表に載っている (Nikolaeva and Xelimskij 1997:156)。このことから見て、この母音 e は音素の一つとして考えられている可能性が高い。テキスト集では、おそらく印刷上の都合から、この母音は ə と表記されているが、ここでは文法概説から更に一歩を進めた表記が導入された。すなわち、この母音 ə の存在と一定の音的環境を条件として、長母音 (の一部) を短母音で表記する方式が導入されたのである。

具体例を挙げよう。既に長母音の例として出した is'e 「てっぺん」に対して、このテキスト集での表記は is'ə である。長母音 i はここでは短母音 i として表記されている。また、既に二重母音の例として出した ierej 「流れている (3人称単数)」に対して、このテキスト集での表記は eraj である。ここでは二重母音が長母音 e の異音として解釈され (2.2 節 (B) での議論を参照)、更にその長母音 e が短母音 e として表記されている。更に、 uon'ej 「子を持つ・生む」

という単語に対して、このテキスト集での表記は öñaj である。ここでは二重母音が長母音 ö: の異音として解釈され、更にその長母音 ö: が短母音 ö として表記されている。

このような表記の背後にある音的環境はどのようなものだろうか。このテキスト集の巻末に付けられた注釈の中で、ニコラエヴァは次のように述べている。「短音節の単語, CVCə, CVCCə およびそれらの派生語（ここで C は子音, V は母音を指す）においては、位置による母音の長さは表記しなかった。それらは単語の構造から完全に予測できるためである」（Nikolaeva 1997:149, 拙訳）。注目されるのは、ここで具体的に音的環境が条件として提示されていることだ。ここではまず CVCə という環境を取り上げよう。念のために付け加えておくと、それぞれの先頭にある C が欠けて、VCə となっている場合もこれに含まれるので、正確には (C)VCə と書かれるべきだろう。上に取り上げた例はこの VCə の例であり (is'ə 「てっぺん」), erəj 「流れる」と öñaj 「子を持つ・生む」はその「派生語」（ここでは 3 人称単数 -j を伴った屈折形）の例である。先頭に子音を伴った CVCə の例としては čejə 「冬」と jöm 「見る（3 人称単数）」を挙げておく。いずれも長母音・二重母音で表記すれば če:je [tʃe:dʒə] ないし čieje [tʃiedʒə], として juöm [juöm] となるところである。

このようなニコラエヴァの提案は、長母音（の一部）を基底形（短母音）から派生させることを可能にする。しかもその派生が可能となるような条件も指定している。まさにこれは筆者が上で述べたような、「何らかの適切な音的環境を見出すことによって、基底形（短母音）から長母音を導き出す操作を行う」ことである。そして提案された 3 つの音的環境の中で、(C)VCə は最も例外が少なく、適切に長母音が派生されるケースであると思われる。

それでは、ニコラエヴァによるこの提案を拡張していけば、すべての長母音を適切に基底形（短母音）から派生させることができるのだろうか。残念ながらこの可能性にはあまり期待が持てない。たとえば単音節の単語の場合、短母音を持つ単語 (met 「私」, tit 「あなたたち」, kin 「誰」, čoq- 「切る」など) と長母音・二重母音を持つ単語 (tat 「そして」, čui 「肉」, fai 「木」など) が混在しているので、これらは「単語の構造から完全に予測できる」ようなものではない。これらに適切な母音の長短を与えようとするれば、結局は最初から母音の長短を指定しておかねばならないことになる。すぐ上で検討した音的環境 CVCə についても若干の問題はある。たとえば従来 čuge 「道」と表記されてきた単語（発音は [tʃüge ~ tʃúgə]）に対して、この方式で最も近い表記を当てるとすれば čugə となるだろう。ところがこれは上記の環境を満たすので、誤った音形である *č:uge が導き出されてしまう。同書ではこのような問題を避けるために čugö という表記を当て、上記の音的環境を満たさないような工夫をしているが、これは実際の音声とずれがある。その意味で、いささか場当たりの解決法のように思われる。

新たに導入された母音 ə の性質も不明瞭な点が多い。Nikolaeva and Xelimskij (1997:156-157) によれば、この母音（この記述での表記は e）は特定の音価を持たず、a, e, o の間で変動するとされる。中舌かつ中程度の広さという特徴から、おそらく弱化した母音を指すと思われるが、

これ自体を一つの音素として立てる根拠（最小対立例など）は特に示されていない。さらに彼らの母音体系の中ではこの母音 e だけが長母音にならないとされているので、母音体系全体の中で見ても、その特殊性が際立つ。結局のところこの母音は、CVC α というような環境を指定する以外には特段の機能を果たしていないように思われる。

Nikolaeva (1997) の表記を生み出した発想はエレガントで、CVC α のような音的環境に限って言えば、実際に長母音を基底形（短母音）から上手に派生させることもできる。その意味で一定の有効性を持つことは事実だ。しかしその有効性はあくまで一部の長母音の派生に限られるので、結局多くの場合、最初から \bar{a} や \bar{u} などのように長母音を表記しておく他はない（これは実際にテキスト中の随所に見られる）。長母音を短母音音素に還元するという解釈の可能性は、十分に有効な段階に至っていないと考えるのが妥当であろう。

3.2 解釈 (B) の検討

解釈 (B) は、短母音音素と長母音音素を別々に立て、両者を独立した音素として解釈するという可能性であった。

原則的に言うならば、明確な最小対立例を持たないような短母音と長母音のペアについて、敢えて互いに独立した音素を立てるという考え方を支持する根拠は薄い。コリマ・ユカギール語がなぜこのような状況を示すのかを究明することはそれ自体興味深い問題ではあるが、現在までに相当数の単語が収集された時点でもなお、十分な最小対立例を短母音と長母音の間で示すことができない状況は明らかである。

既に指摘したように、仮にこの解釈を採用したとすれば、短母音と長母音に対して同じ姿をした体系が得られる点は魅力的に映る。しかしこの場合でもなお、データを更に検討することによって新たな問題が浮上することを指摘しなければならない。

上で論じたコリマ・ユカギール語の長母音の体系（表3）を提案する際に、3つの二重母音をそれぞれ長母音に還元したことを想起しよう。具体的には、二重母音 ie , uo , $u\bar{o}$ をそれぞれ長母音音素 $/e:/$, $/o:/$, $/\bar{o}:/$ に還元したのである。しかしながら、この還元の方角性に対して問題点が指摘できる。既に現地調査によるデータで指摘されている通り、これらの二重母音や長母音の出現する度合いには偏りがある。具体的には次のようになっている：

(4)

	長母音	二重母音
音素 $/e:/$?	e : 例はごく少数	ie 例は多数
音素 $/\bar{o}:/$?	\bar{o} : 例なし	$u\bar{o}$ 例は多数
音素 $/o:/$?	o : 例は多数	uo 例は多数

この分布を基に派生の方向性を考えるなら、多数の例がある方を基底形として考え、その基底形から少数の例にすぎない方（網掛け部分）を派生させるのが常識的ではないだろうか。仮にそう考えるなら、1番目の音素の基底形として立てるべきものはむしろ /ie/ である。そして、ö: が実証されない以上、2番目の音素の基底形として立てるべきものは /uö/ しかない。3番目の音素の基底形はどちらか決め難いが、仮に長母音の方を基底形として採用したとしよう。すると結果は次の表のようになる：

	前舌	後舌
狭	i: ie	u: uö o:
広		a:

表4 コリマ・ユカギール語の長母音の音韻論的解釈（試案の改訂版）

表4は短母音音素の体系と同じ姿でもない上、内部でもあまり均整が取れていない。しかしながら、データから確認される出現の頻度から見れば、こちらの表の方が現実に即した長母音音素の体系であるとは言える。もっとも、結果として得られる体系の「美しさ」はかなりの程度減じてしまっている。

このように検討してみると、短母音音素と長母音音素を別々に立て、両者を共に独立した音素として解釈するという可能性は、残念ながら見込みが薄いと言わなければならない。

3.3 解釈 (C) の検討

解釈 (C) は、同じ短母音音素2つの連続として長母音を解釈する可能性であった。また、二重母音は異なった短母音音素2つの連続と解釈される。

既に述べたように、この可能性を取るなら、音韻論的解釈にあたって多くの仮定を持ち込む必要がない。その意味でこれは素朴ではあるが、簡明直截な解釈だと考えられる。さらにこの解釈は、将来見出される(かもしれない)短母音と長母音の最小対立例があっても、うまく対処できる利点も持ち合わせている。たとえば仮に o:ji: 「水」に対して、別の意味を持つ単語 o:ji: が見出されたと考えてみよう。その場合、前者と後者の音韻論的解釈はそれぞれ /oojii/ と /ojii/ のようになるので、結局は音素 /o/ の数によって対立が生まれる（前者は2つの、後者は1つの音素 /o/ を持つ）。

敢えて問題点を指摘するとすれば、この音韻論的解釈を取るなら、2つ並んだ母音の一方だけに作用するような音韻規則を定式化することが可能となるが、コリマ・ユカギール語にはどうやらそのような音韻規則が存在しないということだ。短母音が2つ並んだ形の長母音を持ち、かつそのような音韻規則を持っているフィンランド語を例に挙げて、この点を多少論じてみたい。

フィンランド語では名詞を複数（主格と対格を除く）に屈折させる際に、複数標識 *-i-* が名詞語幹に付く。たとえば *talo* 「家」に対して、*taloissa* 「家々の中で」（*-i-* 複数、*-ssa* 内格）など。動詞の屈折においても *-i-* という要素が現れ、こちらは過去時制の標識である。たとえば *sano* 「言う」に対して、*sanoi* 「言った」（*-i-* 過去、*-ø* 3人称単数）。ところが、語幹が長母音（同じ短母音2つを並べて表記する）の場合、2つの母音のうち1つが削除され、そこに *-i-* がつく：

- (5) *puu* 「木」 *pu-i-ta* 「木々を」（*-i-* 複数、*-ta* 分格）
maa 「国」 *ma-i-ssa* 「国々の中で」（*-i-* 複数、*-ssa* 内格）
saa- 「得る」 *sa-i* 「得た」（*-i-* 過去、*-ø* 3人称単数）
jää- 「残る」 *jä-i* 「残った」（*-i-* 過去、*-ø* 3人称単数）
(Karlsson 1983:40)

ここでは明らかに、2つの短母音の一方だけに音韻規則が作用している。この意味で、フィンランド語の長母音を同一の短母音2つの連続として捉える見方は音韻規則の上でも有効性を発揮している。なおフィンランド語の二重母音では、上と同じ音的環境において、二重母音の最初の部分が削除され、その後に標識 *-i-* がつく：

- (6) *tie* 「道」 *te-i-ta* 「道を」（*-i-* 複数、*-ta* 分格）
työ 「仕事」 *tö-i-den* 「仕事の」（*-i-* 複数、*-den*（複数の）属格）
juo- 「飲む」 *jo-i* 「飲んだ」（*-i-* 過去、*-ø* 3人称単数）
syö- 「食べる」 *sö-i* 「食べた」（*-i-* 過去、*-ø* 3人称単数）
(Karlsson 1983:40)

ここでも2つの短母音の一方だけに音韻規則が作用していることは明らかである。

コリマ・ユカギール語にはこの種の音韻規則が存在しない。既に述べたように、何らかの屈折接尾辞がついた場合でも、長母音はそのままの長さで保たれるからである。したがって、長母音を短母音2つの連続として解釈する可能性に関しては、フィンランド語とは異なって、少なくとも音韻規則上、特に大きな利点はない⁵⁾。しかしながら同時に、ここまで議論してきた多くの問題点をこの解釈が回避できることも確かだ。結局のところ、消極的支持にとどまるものの、現時点での結論としてはこの解釈 (C)、つまり、同じ短母音音素2つの連続として長

母音を解釈する可能性が、3つの可能性の中では最も妥当だと考えられる。

4. 結びに代えて

以上、コリマ・ユカギール語の長母音の音韻論的解釈に関して3つの可能性を検討してきた。その結果、同じ短母音音素2つの連続として長母音を解釈する可能性が、3つの可能性の中では最も妥当だという結論が得られた。

最後に、二重母音の問題も含めて、コリマ・ユカギール語の記述における長母音・二重母音の表記について、筆者なりの考えを述べておきたい。

上記の結論から直接導かれるものであるが、長母音の表記はフィンランド語と同じく、同じ母音を2つ並べたものとして表記するのが望ましいだろう。つまり、aaやooのような表記である。また、この解釈を踏まえた上であれば、印刷やテキスト処理の都合により、āやōのような長音記号（マクロン）を乗せた形や、IPAに準じた繰り返し記号（コロン）を用いてa:やo:のように表記することも許されよう⁶⁾。一方で、音節構造等の条件によって長音記号を付けたり、あるいは付けなかったりするような処置は、現時点では早計ではないかと思う。そのような処置は定式化された規則と表裏一体で存在するものなので、結局はテキストの読みに関して将来、不用意な議論を招きかねない⁷⁾。

二重母音の表記についての問題は難しい。2.2節(B)の議論で述べたように、二重母音は長母音との間で、ある程度自由変異的に交替しうる(ie~e: 交替およびuo~o: 交替)。純粋に音韻論的に見れば、これを余剰的と見て、長母音と二重母音のどちらかを選んで音素を立て、両者を強引に統一するという処置が考えられなくもない。しかし既に論じたように、もう一つのあり得べき交替(uö~ö: 交替)は存在しない。さらに、ie~e: 交替やuo~o: 交替においても、出現の度合いの偏りがある(上述の(4)を参照されたい)。このような事情を無視して、長母音と二重母音のどちらかを表記から除外してしまうことには、少なくとも記述という点から見れば、問題点がないとは言えない。筆者としては、自由変異の状況、出現の度合いの偏りなどを明記したうえで、話されたそのままの形で長母音と二重母音を表記しておくことが、当面望ましいと考える⁸⁾。

-
- ✓ 5) このことはまた、日本語音韻論に見られるような長音素 /R/ を、コリマ・ユカギール語に設定することに特段のメリットはないことを示している。
- 6) 同じ母音を2つ並べた形で長母音を表記する方式は、特に辞書や教科書などでは有効であろう。例として長崎・遠藤編(2004)を参照されたい。ここではjoobii「森で、岸で」やkiejoo-「前である、先頭である」のような形で長母音・二重母音が表記されている。この表記を採用された編者の長崎氏(語彙集本文の担当)の慧眼に感謝する。
- 7) たとえばラテン語の場合、長母音と短母音の区別は原文では表記されないのが一般的である。このため、教科書や辞書の編纂にあたって、母音の長さを決定するために研究者たちの多大な努力が必要となった。

言語の記述はもちろん、言語学研究の重要な一部を成す。しかし、言語の記述は同時に、学問的営為を超え、人類の貴重な文化の一端を未来に遺す仕事でもある。コリマ・ユカギール語のような少数言語、いま消滅の危機に瀕した言語の研究にとっては特に、この後者のミッションを意識することが重要ではないだろうか。

【参考文献】

- 遠藤 史 (2005) 『コリマ・ユカギール語の輪郭—フィールドから見る構造と類型—』 名古屋：三恵社。
Karlsson, Fred (1983) *Finnish Grammar*. Porvoo - Helsinki - Juva: Werner Söderström Osakeyhtiö.
Krejnovič, E. A. (1979) Jukagirskij jazyk. In: *Jazyki azii i afriki*. Volume 3: 348-369. Moskva: Nauka.
—— (1982) *Issledovanija i materialy po jukagirskomu jazyku*. Leningrad: Nauka.
長崎 郁・遠藤 史 (編) (2004) 『コリマ・ユカギール語例文つき語彙集』 (「環太平洋の言語」成果報告書 A2-044) 吹田：ELPR, 大阪学院大学情報学部。
中山恒夫 (2007) 『古典ラテン語文典』 東京：白水社。
Nikolaeva, Irina (1997) *Jukagir texts*. Specimina Sibirica XIII. Szombathely: Savariae.
Nikolaeva, I. A. and E. A. Xelimsij (1997) Jukagirskij jazyk. In: *Jazyki mira: Paleoaziatskie jazyki*. 155-177. Moskva: Indrik.

✓ 8) 希望的観測に過ぎないが、将来の研究において、大量のデータを電子的に処理することにより、予想しなかったような要因 (たとえば文体差, 年代差, 方言差) などが判明することもあるかもしれない。そのような研究を可能にするためにも、現時点では観察されたデータに近い表記を採用しておくのが望ましいと考える。

On the Phonological Interpretation of Long Vowels in Kolyma Yukaghir

Fubito ENDO

Abstract

Looking at the vowels of Kolyma Yukaghir, a minority language spoken in the upper reaches of the Kolyma River in northeastern Siberia (mainly in the Sakha Republic of the Russian Federation), both short and long vowels can be found. Although the existence of long vowels is clear from phonetic observations, the situation is not so straightforward when trying to give them a proper phonological interpretation. The author discusses what the most appropriate phonological interpretation of long vowels in Kolyma-Yukaghir is by examining various phonetic phenomena associated with them. After introducing basic phonetic observations concerning short and long vowels in Kolyma-Yukaghir, the author suggests that there are at least three phonological interpretations of long vowels. The author then discusses these three interpretations in turn by examining more detailed data and points out the advantages and disadvantages of each interpretation.